

自衛隊を出動させよ

兵庫県が自衛隊出動にしゅん巡していたところ、新党さきがけ代議士高見裕一（三九）はがれきの下で人々がうめく東灘区の現場から、携帯電話で出動を必死で防衛庁に直訴していた。県の派遣要請よりも一時間二十分も早い、午前八時四十分――。

同区住吉山手のマンションから、携帯電話とカメラ、ラジオを持ってJR住吉駅、六甲道駅周辺の被災地に向かった。

一・五キロの沿道は廃墟となり、悲鳴が聞こえる。こんなことがあっていいのか。頭をこぶしで殴り「冷静になれ」と言い聞かせた。

携帯電話で警察や消防に連絡するが、つながらない。阪神間の百四十局の無線基地局が使用不能となり、わずかに残った基地局へ電話が殺到、回線がパンク状態になっていた。

高見は防衛庁へ電話をしようと思ったが、電話番号を思い出せない。東京の第二議員会館七階の事務所にいた秘書榎坂英樹（三二）を呼び出した。電話は通じた。「何人もの人が目の前で死んでいる。玉沢防衛庁長官に電話しろ。おれはクビをかける。高見が自衛隊を出してくれと言っている、と頼んでくれ」

榎坂は防衛庁に電話を入れた。だが、長官の玉沢徳一郎（五七）はまだ登庁していない。榎坂は「不在でもいいから、長

官室へつないで下さい」と追った。電話を受けた職員は「知事からの要請がなければ、我々は動けません。兵庫県に言わせて下さい」と答えるだけだ。榎坂からの連絡を受けた高見は「兵庫県の東京事務所に電話しろ。行政回線で知事から要請してもらうように頼め」と叫んだ。

地元出身の衆院議長土井たか子（六六）なら、きつとわかってくれる。議長公邸に電話をしたが、土井は公邸へ向かう車中にて高見の声は届かなかった。さきがけの代表でもある大蔵大臣の武村正義（六三）に訴えよう。「神戸が大変です。テレビで伝えるような生易しい状況ではないんです。必死の叫びに武村は、「打てる手は打つ。冷静に状況を把握せよ」と諭した。

その間にも、三メートル先で、家がじわじわと炎に包まれていく。赤ん坊の泣き声が聞こえる。地獄のような光景が目に見え込んできた。

首相の村山富市（七〇）は、この日の予定時間を五十二分繰り上げ八時二十六分に官邸入り。九時十九分、取材陣に「大変な状況だな。被害が大きくなっているようだし、非常災害対策本部の設置も考えねば。国土庁長官を派遣する」。首相の視察はと、聞かれ「もう少し、状況を見ないと」。即断を避けた。

同じころ、新民主連合会長の山花貞夫

（五）は、日本社会党・護憲民主連合の会派離脱届を党に提出。新党旗揚げに奔走していた。

高見は懸命だった。自分の周りで起きていることの情報を、秘書から県東京事務所を経由して県に送り続けた。午前中で五十件余り。声がつぶれてしまった。

十時ごろには、灘区備後町の康雄会西病院にいた。

ここには別の異様な光景があった。毛布に包まれた遺体が廊下にくっつくも横たわっている。まるで野戦病院だ。いったい何人死んでいるのか。

午前九時五十分、消防庁発表（第三報）。

「死者一、負傷者五十二、火災二十二、住宅損壊六……」

高見の見た現実とはあまりに落差の大きい発表だった。



第一勧銀神戸支店

1916年、古典主義建築を得意とした長野宇平治が設計。2階建て。正面のイオニア式の6本の柱がシンボルだった（神戸市中央区、1月17日撮影）